

# 【漢検漢字文化研究奨励賞】佳作

## 埋字と脱字

—篆隸万象名義の掲出字数をめぐる問題—

北海道大学大学院文学研究科博士後期課程 2年 李 媛

### 1 はじめに

高山寺本篆隸万象名義（以下万象名義）の掲出字数は、おおよそ 16,000 字と言われる。しかしながら、具体的な字数について、先行研究の集計では、15,657 字から 16,917 字までの開きがある。これはなぜかというに、高山寺本の書写の際、あるいはそれ以前に、掲出字の脱落、誤写、重出、さらに掲出字が注文に繰り込まれるといった問題が生じており、その取り扱いのちがいが掲出字数の認定に現われたものと考えられる。

高山寺本万象名義までの書写過程において各種の問題が生じたことを考えれば、万象名義の掲出字を認定、整理する際に、玉篇残巻と突き合わせることが必要となる。一方で、現存する玉篇残巻諸本は、書写年代や底本の相違から、それぞれ異なる性格を有する。貞莉（1958）は、反切、部首内掲出字の配列、部首配列の考察によって、玉篇残巻諸本と万象名義の親近性を論じており、貞莉（1989）は万象名義によって残巻玉篇相互の異本性が確認されると指摘した。上田（1970）はさらに反切用字の特色から、玉篇残巻諸本の新古の階層を究明した研究成果である。したがって、万象名義の掲出字数をめぐる問題を整理することは、掲出字数を数えることにとどまらず、掲出字の観点から、説文解字・宋本玉篇・玉篇残巻などと照合することによって、成立当初の万象名義や依拠した原本玉篇の収録字として認定できる範囲を限定することを意味する。

万象名義の掲出字を整理し、総字数を検討するには、高山寺本万象名義における繰り込み・脱落・重出・誤写の諸問題を段階的に整理することが必要となる。本稿では、その一段階として、掲出字認定に関する研究成果を踏まえ、掲出字の形式に着目して、万象名義における注文に繰り込まれた掲出字、脱落した掲出字を整理する。最後に、この整理の結果として、掲出字数として考えられる範囲を提示したい。

本稿では、次のように用語を定義する。まず、掲出字が注文に繰り込まれたものを「埋字」と呼ぶ。埋字には 2 種類がある。一つは、音注・義注が備えられており、本来掲出字であったと考えられるもので、これを埋字 A とする。もう一つは、音注や義注が備えられず、本来は掲出字として存在したが、異体関係を示すことに重点が置かれたと思われるものであり、これを埋字 B とする。脱字にも 2 種類がある。一つは、掲出字が脱落するが、注文のあるものであり、これを脱字 A とする。もう一つは、説文解字及び玉篇残巻<sup>1</sup>・逸文、新撰字鏡の玉篇引用部分、宋本玉篇（増補部分を除く）に本文が存するため万象名義にも本文があったと考えられるものであり、これを脱字 B とする。

以下、まず先行研究を検討する。次に、集計の方針を述べ、埋字 A・埋字 B、脱字 A・脱字 B のそれぞれについて認定の規準と問題点を検討する。最後にこれらの集計結果を示し、万象名義の掲出字数を考える基礎とする。

1 調査は東方文化叢書の複製本により、これに欠ける部分は古逸叢書本による。

## 2 先行研究

### 2.1 万象名義の掲出字数について

万象名義の掲出字数は原本玉篇に相当するとされる。原本玉篇の掲出字数は、唐封演の封氏聞見記に 16,917 字と記録される。それに従えば、万象名義の字数もそれに相当することになる。

吉田（1954）では、15,657 字と具体的な数が示されるが、その詳細な言及はない。

宮澤（1977）は掲出字の全体を翻字した研究成果である。掲出字についての考察と説文解字、玉篇残卷、宋本玉篇、新撰字鏡などとの対照調査の結果も整理されている。ただし、集計の数値は示していない<sup>2</sup>。

呂（2007）は万象名義全文の翻字である。集計した掲出字数は、「掲出字及び重文を合わせて 16,429 字あり、重複の 152 字を除外すると、16,277 字である」（「重文」とは異体字を指す）とする。

また、中国での近年の万象名義の掲出字数に関する注目すべき成果として、柳・劉・李（2013）がある。説文解字と対照し、万象名義の卷（前 4 帖は 50 卷、後 2 帖は 15 卷）ごとに掲出字を集計したもので、結果として 16,275 字（掲出字：15,925 字、重文：630 字、重複字：280 字）あったとする。

これらの研究で掲出字数が異なるのは、それぞれの集計の規準に起因すると考えられる。その規準については、ほとんど明記されるところがなく、相違点を明確にすることは困難である。やみくもに異なる研究成果を積み重ねないためにも、今後は集計規準を明らかにし、結果の詳細を示したうえで掲出字数を論じる必要があると考える。

### 2.2 玉篇系字書における掲出字の認定についての研究

#### 2.2.1 宮澤（1977）

宮澤（1977）は万象名義の掲出字を一覧しただけでなく、万象名義で注文に繰り込まれている掲出字（本稿のいう埋字に相当するもの）なども示される。そして、万象名義を説文解字、玉篇残卷、宋本玉篇、新撰字鏡などとも対照し、本稿のいう脱字 B に相当するもの、つまり万象名義で脱落していると認められる字、宋本玉篇に存する字（増補部分を除く）、新撰字鏡または説文解字にも見られ、玉篇に本来存した可能性の高い字を一覧表に反映させた。

馬淵（1978）は、篆隸万象名義の資料的価値のひとつは、原本玉篇の骨格をかなり忠実に伝えているため、原本玉篇及び宋本玉篇との比較作業は絶対に必要であること、「掲出字一覧表」はその前段階の研究と認めるべきであることを指摘した。

---

2 平成 26 年 11 月 2 日、訓点語学会第 111 回研究発表会において本稿の概要を口頭発表した際、発表会の席上、宮澤氏の集計による篆隸万象名義の字数について、ご教示を賜った。その詳細は次の通りである。篆隸万象名義の掲出字数 15,629 字、他項へ繰込の親字 175 字、親字へ繰込の異体字 316 字、合計 16,120 字。篆隸万象名義にないもの、説文・宋本の両方にある親字 156 字、説文・宋本の両方にある異体字 307 字、宋本にのみある親字（増補部分を除外）185 字、合計 16,768 字。

## 2.2.2 工藤 (2002)

工藤 (2002) は、原本玉篇の重文について、万象名義・宋本玉篇における受容の状況を考察し、宋本玉篇の重文は、伝統的な注記として継承されたため、原本玉篇の重文の代替として用いることが可能であることを示した。対象字書の異体の表示の様式について、「A ある掲出字に続けて異体関係にある文字を掲出する様式」と「Ba ある掲出字の注文内に、異体関係にある文字を「○字」・「作○」等によって示す様式」とに分ける。本稿の埋字 B は Ba に相当する。工藤 (2002) は、「古文」・「籀文」などの特徴的な形式を中心に調査したものであり、網羅的全身的な調査には及んでいない。

## 2.2.3 臧 (2004)

臧 (2004) では、玉篇の掲出字について、「項目構造」と「字体・字種」との二方面から論述する。「項目構造」について、宋本玉篇において、掲出字は見出しと注文との二つの部分に含まれ、注文レベルに収録される異体掲出字が多いが、従来の研究に見落としがあると指摘する。そして、「字体・字種」について、異体字をすべて異なる掲出字として集計する方法と異体を考慮せずに字種で集計する方法があると述べる。宋本玉篇を実例とし、この二種類の方法で集計すると、それぞれ 22,794 字と 20,493 字の結果になり、おおよそ 2,000 字の差があると指摘する。

## 2.2.4 呂 (2007)

呂 (2007) は中華書局写真版のテキストを基礎とし、高山寺古辞書資料第一に収録されたテキストも参考に、説文解字、玉篇残卷、宋本玉篇などの文献と照合し、校勘を加え万象名義の全文を翻刻したものである。掲出字は大字で翻刻されており、参考になる。

## 2.2.5 大柴 (2009)

大柴 (2009) は万象名義の部首字一覧についてまとめたものである。万象名義の全文の解読も終了しているようであるが、まだ公開されていないため、本稿は特に言及しない。

## 2.2.6 柳・劉・李 (2013)

柳・劉・李 (2013) では、万象名義の掲出字を正字頭<sup>3</sup>、积文字頭、箋注字頭に分類する。正字頭は注釈の対象となる大字で掲出された掲出字であり、一方の积文字頭は注文の中に示された掲出字であるが、大多数は正字頭の重文である。箋注字頭は刊修者により、補充的な注釈の中に示された掲出字である。いずれも具体例が示されず、判断規準として不明なところがあり、また掲出字数を集計した際にも、分類ごとの数字は示されていない。

---

3 中国側の研究では掲出字を「字頭」とする。

### 2.2.7 池田 (2014)

池田 (2014) は、平安時代の日本の古辞書の総合データベース (HDIC) を構築するプロジェクトとして、日本の古辞書からは篆隸万象名義・新撰字鏡・類聚名義抄のデータベース化に取り組んでいる。篆隸万象名義に関しては、UCS (Universal Coded Character Set ; 国際符号化文字集合) の範囲で掲出字・所在情報などを整理した UCS 対応版が完成し、公開済である<sup>4</sup>。さらに、本文データベースの構築が進められている。

## 3 万象名義における掲出字の種類及び掲出字数の集計について

漢字字書は、その時代の漢字を収録し、収録された漢字について、さらに字音・字義・字体の記述を加えたもので、漢字学習や社会生活の漢字基準として参考になる書物である。収録された漢字は、字書が説明する対象であり、骨組みであるが、国や研究者によって異なる名称が用いられている。例えば、掲出字のことを中国では主に「字頭」と呼び、日本では「標字」「標出字」「親字」「掲出字」「見出字」などと呼ぶ。本稿で議論する内容は、宮澤俊雅「掲出字一覧表」(1977) を踏まえたうえで修正、発展させるものであるため、本稿ではこれに倣い、「掲出字」という用語を「漢字字書における説明の対象となる漢字」の意味で使用し、考察の中心とする。

高山寺本万象名義の掲出字に関して原本玉篇との関係を見ると、楊 (1901)、張 (1934)、周 (1935)、貞荊 (1958)、上田 (1970)、宮澤 (1998) は、万象名義は原本玉篇を抜かし、現存の玉篇残巻とは細部な違いがあるものの、基本的には原本玉篇を忠実に継承するものと考えている。一方で、万象名義を玉篇残巻と比較した場合に観察される部首順、反切、字義の相違点については、山田 (1928)、岡井 (1933)、川瀬 (1955) は、万象名義が編纂されたときに、撰者独自の見解が加えられたとする。このように万象名義と原本玉篇との関係については研究者によって意見が分かれていることから、字書としての骨組みである掲出字を精査する必要があると考える。

本稿では万象名義は原本玉篇を忠実に継承していると仮定し、万象名義及び原本玉篇に存在した可能性のある掲出字を網羅的に考察しようとするものであるが、考察に入る前に「掲出字」について規定しておく。万象名義の掲出字は、その体裁や先行する字書である説文解字、原本玉篇から受け継がれていることを考慮すると、狭義のものと広義のものがあると考え。狭義の掲出字は万象名義における隸書大字の掲出字を指し、広義の掲出字は隸書大字の掲出字以外のものも含め、この中に「埋字」と「脱字」を設定する。

高山寺本万象名義は各葉を上下二段、六列に書写する体裁を基本とする。この枠内に篆書 (全体の約 6% の部分にしか篆書掲出字が付かない) と隸書<sup>5</sup> の大字で掲出字が掲げられ、下に注文が付される。高山寺本の体裁から判断して、隸書の大文字で記されたものを狭義の掲出字 (隸書掲出字) とする。

一方、玉篇残巻では大字の掲出字であるが、万象名義では隸書掲出字として掲げず、

4 <http://rose.hucc.hokudai.ac.jp/~o16404/shikeda/kojisho.html>

5 書名及び唐代の用法に従って「隸書」を用いる。現在一般に楷書と呼ぶものをさす。

注文に繰り込まれるものがある。宮澤（1977）ではこのようなものを、「篆隸万象名義で注文に繰り込まれた掲出字」と認定し、掲出字一覧表の該当位置に一字下げ挿入している。本稿ではこれを広義の掲出字の中の「埋字」と定義する。この埋字には2種類がある。

一つは、音注または音注・義注を備え、本来掲出字であったと考えられるもので、本稿ではこれを埋字Aとする。埋字Aに該当するものは、周（1935）では「名義の正文は他の字の下に付すものが多く、例えば玉部における瑀の下にある理、璫の下にある璃、土部における垚下にある璣などがそれである。」<sup>6</sup>との指摘がある。

もう一つは、音注や義注を備えず、異体関係だけを示すものであり、本稿ではこれを埋字Bとする。埋字Bに該当するものは、原本玉篇では異体掲出字として存在する。上田（1970）ではこれを「重文」と称し、「古文・籀文・或体等、玉篇で標出字としていますが、その上の字と同字で、反切を記していない字の総称として用いる」と定義した。本稿では、万象名義の注文に繰り込まれている原本玉篇の異体掲出字を埋字Bとして扱う。

これに対して、万象名義に脱落した掲出字を「脱字」と呼ぶ。脱字にも2種類があり、一つは、掲出字が脱落するが、注文のあるものであり、これを脱字Aとする。もう一つは、説文解字及び玉篇残巻・逸文、新撰字鏡の玉篇引用部分、宋本玉篇（増補部分を除く）に本文が存するため万象名義にもあったと考えられるものであり、これを脱字Bとする。この種のもは、宮澤（1977）では篆隸万象名義で脱落していると認められた字、宋本玉篇に存する字（増補部分を除く）、新撰字鏡、または説文解字にも見られ、玉篇に本来存した可能性が高い字として認定し、「掲出字一覧表」に反映させている。

本稿では、高山寺本万象名義の掲出字を上記のように分類・認定する。まず、隸書の大字で記載された掲出字を集計する。次に、注文に繰り込まれた埋字<sup>7</sup>を、その性質の違いにより埋字Aと埋字Bとに分類・認定した上で、さらに、万象名義に脱落したと考えられるものを、その根拠によって、脱字Aと脱字Bとに分類する。分類の基準については以下の節に述べる。

## 4 埋字と脱字についての分析

### 4.1 万象名義埋字と脱字の問題を通した原本玉篇の原貌の復元

本稿では掲出字数を確定するために、埋字と脱字の概念を設定し、これらを整理する作業を行うが、それは、高山寺本万象名義までの書写過程で生じた問題を念頭に置きながら、可能な限り万象名義が依拠した原本玉篇の原貌を復元したいからである。特に埋字Bを整理するのは、万象名義の掲出字とその字体の検討を通して、原本玉篇における異体字の状況を把握するのに必要な作業である。

埋字と脱字の問題を重視する研究は従来少なく、特に埋字については、十分な扱いを

6 周（1935：p. 202）「且名義正文附於他字之下者甚多，如玉部瑀下之理，璫下之璃，土部垚下之璣，是也」

7 ある掲出項目の注文に繰り込まれる埋字という現象は、万象名義のみならず、ほかの古辞書や音義類にも存在する。埋字という概念は、この種の問題を整理するための便宜となる。

受けてこなかった。埋字 A については、掲出字とほとんど区別されずに集計されることが多く、埋字 B は、掲出字として認定せず、集計の対象外にされることが多かった。

以下、埋字 A・B、脱字 A・B について、それぞれ検討を加えていく。

## 4.2 埋字 A

### 4.2.1 埋字 A の認定と分析

埋字 A の認定の方法を述べる。まず、項目の注文中に、主字（埋字が繰り込まれた項目の掲出字）と異なる字の記述にかかわる部分を確定する。次に、音注・義注の両方またはそのいずれかを備えるものは埋字 A と認定する。全部で 150 項目が該当する。その帖ごとの内訳は、第 1 帖 105 項目、第 2 帖 1 項目、第 3 帖 1 項目、第 4 帖 2 項目、第 5 帖 40 項目、第 6 帖 1 項目である。次に例を示す。埋字、主字（埋字が繰り込まれた項目の掲出字）、主字の注文（埋字とその注文を含む）、所在の順で示す。埋字 A とその注文を □ でくくり下線を施す。句読点は筆者による。

- (1) 柴 柴 仕佳反。祭天曰焚、柴也。〔柴：仕佳反。燔。〕 禴、柴文。（第 1 帖 17 丁表）
- (2) 玘 璵 湯典反。古文。玘也。璵、古文。〔玘：去理反。〕（第 1 帖 21 丁裏）
- (3) 理 瑀 魚胡反。〔理：力紀反。正也、吏也、分也、性也、事也、道也、從也、治也、媒也。〕（第 1 帖 27 丁表）
- (4) 邠 都 如灼反。〔邠：舒甚反。〕（第 1 帖 48 丁裏）
- (5) 囂 𠂔 詡煩反。驚呼也。〔囂：火元反。〕驚也。（第 3 帖 26 丁表）
- (6) 泛 泠 或取也。〔泛：孚劒反。舟流兒。〕（第 5 帖 93 丁裏）
- (7) 灑 灑 上同。〔灑：徒見反。滓也、澤也。〕（第 5 帖 97 丁裏）

埋字 A と対応する主字との関係を検討してみると、大きく四つのタイプに分けられる。

- ・注文用字を注釈するタイプ：(1) (2) の「柴」・「玘」ように、主字の注文に用いる字の音・義が難解である場合、それについてさらに説明を加えたもの。
- ・地名用字を合併するタイプ：(4) のように、主字の「都」と埋字 A の「邠」について、万象名義では反切のみが記述される。宋本玉篇で確認すると、  
都 如灼切。左氏傳曰秦晉伐都、秦楚界小國也。（宋本玉篇上 22 丁表）  
邠 舒甚切。左氏傳曰敗戎於邠垂。杜預云周地河南新城縣北有垂亭。  
（宋本玉篇上 22 丁表）

との記述があり、いずれも中国の地名であり、宋本玉篇では詳しい説明がある。このような中国の地名を示す字は、万象名義では、字義を省き、字音を表す反切しか残しておらず、「邠」の項目が「都」の項目の注文に繰り込まれ、一つの項目に統合したと考えられる。このような例は「邑部」では 17 例が確認できる。これらは万象名義では、実用の面を考慮し、義注が省かれた地名用字を一項目に統合したと考えられる。

- ・脱落掲出字を補うタイプ：(6) (7) の「泛」と「灑」は、原本玉篇で確認すると、主字の「泠」と「灑」の次項にある独立した掲出字である（詳細は後述する）。万象名義では最初脱落した項目を順次に前項の注文に補われたと考えられる。
- ・主字と無関係のタイプ：(3) (5) の「理」・「囂」のように、主字の「瑀」と関連

や共通するところがなく、単純に主字の注文中に繰り込まれたと考えられる。

埋字 A のうち、(6) と (7) に対応する玉篇残巻（巻 19 水部）の内容は次の通りである。（玉篇残巻での出現順に示す。）

- (8) 淦 □欠部。又音古暗□…□□□曰淦、水所出西入湖漢。
- (9) 泠 説文或淦字也。廣雅泠寂也。
- (10) 泛 孚劒反。國語泛舟于河、賈逵曰泛浮也。毛詩泛彼柏舟、傳曰泛々流兒也。又曰泛々其景、傳曰泛々駉疾而不疑也。説文從之聲也、此亦汜字、相似而不同。漢書或以爲𦉰字、𦉰覆也。音方隴反。𦉰駕之馬是也。在西部。
- (11) 漉 理屋反。考工記清其灰而漉之。野王案漉猶瀝也。尔雅漉竭也。郭璞曰月令無漉陂と池是也。方言漉涸也、漉極也、郭璞曰漉滲極盡也。廣雅漉盡也。
- (12) 漉 字書亦漉字也。或復為盪字、在皿部。
- (13) 灑 達見反。尔雅灑謂之塗、郭璞曰灑滓也、江東呼塗。或為黥字、在黑部。

「泠」と「泛」は原本玉篇では連続して掲出され、類似形字とは考えられるが、内容上関連しない。「泠」は前項目の「淦」の異体字である。万象名義において、「泛」が埋字 A の形式で「泠」の注文にあるのは、編纂あるいは書写の段階で脱落した掲出字を補うものと考えられる。第 5 帖では、このように脱落した掲出字を順次補うものは 27 項目が確認できる。（原本玉篇残巻に存しない項目については、宋本玉篇にて確認した。）

埋字 A が、原撰部分<sup>8</sup>において、第 1 帖に集中するのは、字書編纂の最初の段階で、体裁上底本となる原本玉篇の掲出字をどのように取り入れるか、その方針がまだ固められていないため、隸書掲出字のほかに、埋字 A のかたちで注文中に繰り込まれるものが多くなったと考えられるが、続撰部分では第 5 帖に埋字 A の例が多いことは、第 1 帖と同様に、編纂方針が固まっていないことが想定される。

#### 4.2.2 埋字 A の詳細

埋字 A と認定する 150 項目について、宮澤（1977）と呂（2007）と対照すると、収録しないものはそれぞれ次の 8 字と 5 字である。

宮澤（1977）で収録しないもの：柴、画、仇、頷、顛、睭、眄、紕

呂（2007）で収録しないもの：柴、画、瑚、頷、紕

上記の「柴」・「画」・「紕」の部首は、それぞれ主字と異なっているが、玉篇残巻の掲出字が該当部首と異なる部首に掲出されているものは、次の 18 字ある（説文解字、字書などで古文とする異体字が 14 字含まれる）。

𦉰（言部）・𦉱（言部）・𦉲（言部）・𦉳（欠部）・𦉴（欠部）・𦉵（甘部）・𦉶（甘部）𦉷（甘部）・𦉸（次部）・𦉹（次部）・𦉺（水部）・𦉻（水部）・𦉼（广部）・𦉽（石部）𦉾（阜部）・𦉿（糸部）・𦊀（糸部）・𦊁（糸部）

万象名義において、これらの中の𦉵・𦉹・𦉺・𦉼・𦊀・𦊁・𦊂の 8 字は隸書掲出字となっており、これは部首が異なっても掲出字項目として成立する傍証になる。𦉰・𦉱・𦉽の 3 字は後に述べる埋字 B となっており、いずれも説文解字や字書による古文

8 万象名義は 6 帖の構成で、第 1 帖から第 4 帖までは弘法大師空海の撰述によるもので、原撰部分といい、第 5 帖・第 6 帖は他の撰者によるもので、続撰部分という。

や籀文としての異体字である。夔・𧯛・𧯛・𧯛・𧯛・𧯛・𧯛の7字は脱字Bとなっている。

以上のように、同一の部首の中に、異なる部首の字も掲出字項目として成立する例が確認でき、したがって、「柴」・「𧯛」・「𧯛」三字は埋字Aと認定し、万象名義では掲出字として単独の項目を立てず、弁似を目的として増訂され、注文レベルで収録された字と考えられる。

## 4.3 埋字B

### 4.3.1 埋字Bの認定

埋字Bは、注文に繰り込まれた掲出字であり、音注や義注を備えず、異体関係だけを示すものである。全部で561項目が該当する。帖ごとの内訳は、第1帖は183項目、第2帖11項目、第3帖29項目、第4帖58項目、第5帖269項目、第6帖11項目である。次の例で確認してみよう。(埋字Bの部分で〔 〕でくくり下線を施す。対応する原本玉篇残巻と宋本玉篇の内容も示す。)

(14) 廟 靡召反。兒。〔廡：古廟。〕(第6帖9丁裏)

(15) 廟 靡召反。尚書七世之廡可以觀德、孔安國曰天子七廡、有德之主則爲宗其廡干不毀。尔雅室有東西廡曰廟。韓詩鬼神所居曰廡神。礼記夫子七廡、三昭三穆与大祖之廡而五、大夫三廡、一昭一穆与大祖之廡而三、士一廡、鄭玄曰此同制也、殷即六廡之也。白虎通曰先祖之尊兒所在也。

(原本玉篇残巻 卷22 廡部)

廡 説文古文廟字也。(原本玉篇残巻 卷22 廡部)

(16) 廟 靡召切。宗廟也。(宋本玉篇下15丁裏)

廡 古文。(宋本玉篇下15丁裏)

(17) 廟 尊先祖兒也。从廡朝聲。廡、古文。(説文解字卷9 廡部)

上記の例では、「廡：古廟」は「廡」と主字「廟」との異体関係を記述する部分である。原本玉篇でその点が確認される。この「廡」は、工藤(2002)の「ある掲出字に続けて異体関係にある文字を掲出する様式」にあたるものであり、重文あるいは異体掲出字ともいう。万象名義では、「廡」は埋字Bとして処理され、説文解字の重文の形式に類似する。

埋字Bを認定する際、原本玉篇の対応項目と比較することが必要であるが、原本玉篇は大部分が散逸しているため、他の関連文献で確認し、判断しなければならない。埋字Bを認定する手順は次の通りである。

- ① 項目の字体の記述にかかわる部分を確定する。
- ② 新撰字鏡の重文や宋本玉篇の重文を確認できる場合、埋字Bと認定する。宋本玉篇の重文は原本玉篇の重文の代替として用いることが有効であるとする工藤(2002)の見解に従うものである。また、新撰字鏡や宋本玉篇の重文との対照調査の結果を整理する宮澤(1977)も参考にする。
- ③ 新撰字鏡の玉篇引用部分の重文や宋本玉篇の重文を確認できない場合、該当字が籀文・古文に相当するか説文解字で確認し、相当する場合、埋字Bと認定する。
- ④ 籀文・古文に相当しない場合、該当字が万象名義のほかの掲出字項目であるかを

確認し、該当字が主字と同部首で、そして掲出字項目でない場合は、埋字 B と認定する。

- ⑤ 該当字が万象名義のほかの掲出字項目である場合は、埋字 B でないと認定する。

なお、原本玉篇では異体関係を示すのは、同部首の場合、異体掲出字として立項して説明する。異部首の場合、「為○字」などの字体注記として注文の中で記し、これはずでにほかの部首で独立の項目として成立するため、本稿では埋字 B として認定しない。

#### 4.3.2 原本玉篇と対応する部分の埋字 B

埋字 B は万象名義の依拠した原本玉篇の重文を掲出字と注文の両方に入れる方針にかかわる。項目構造の観点から、注文レベルにある異体掲出字に注目する。

万象名義と玉篇残巻を比較してみると、38 個の埋字 B を見出すことができる（表 1）さらに、宋本玉篇、説文解字とも対照すると、次のことが分かる。

- ① 原本玉篇の重文項目は主に説文解字、字書、聲類の三つの先行文献から取り入れている。
- ② 原本玉篇の項目ごとの注文は平均約 40 字であり、さまざまな典拠や用例によって意味を記述するが、重文項目の注文は平均約 9 字であり、異体関係を示すことに重点をおいている。
- ③ 玉篇残巻で確認でき、工藤（2002）で指摘された「ある掲出字に続けて異体関係にある文字を掲出する様式」の異体掲出字の一部は、万象名義の第 3 帖、第 5 帖と第 6 帖では埋字 B として処理される。（前掲例（14））
- ④ 説文解字で確認できる対応項目は 21 個あり、いずれの重文項目も主字の注文に繰り込まれる。原本玉篇ではある掲出字に続けて、異体関係にある文字を掲出する様式であるのに対して、万象名義の方は埋字 B であり、説文解字の形式と類似する。万象名義の編纂段階で、重文については、部分的に説文解字の形式を参照しながら、取り入れた可能性がある。次の例で確認する。埋字 B の部分を □ でくくり下線を施す。

(18) 漉 里屋反。竭也。〔漉：同上。〕（第 5 帖 97 丁表）

(19) 漉 理屋反。考工記清其灰而漉之、野王案漉猶瀝也、尔雅漉竭也、郭璞日月令無漉陂々池是也、方言漉涸也、漉極也、郭璞曰漉滲極盡也、廣雅漉盡也。（原本玉篇残巻 卷 19 水部）

漉 説文或漉字也。（原本玉篇残巻 卷 19 水部）

(20) 漉 浚也。从水鹿聲。一曰水下兒也。漉、漉或从泉。（説文解字卷 11 水部）

表 1 万象名義における原本玉篇と対応のある埋字 B

番号	埋字 B	主字	主字注文	原本注文	宋本注文	説文
<b>第三帖</b>						
1	諭	話	朝快反。謂也、調也。 〔諭也話字。〕	説文籀文話字也。聲類或僮字也、僮合僮市也。音古會反。在人部。人部。字書古文為𠄎字、在舌部也。	許界切。怒聲。説文云籀文話。	籀文話从會。
2	諺	諺	直移反。離也、別也。 〔諺：諺字。〕	聲類亦諺字也。	同上。	無
3	諄	諄	補潰反。乱也、逆也。 〔諄古。〕	説文籀文諄字也。	同上。	籀文諄从二或。
4	磨	訾	子移反。量也、思也。 〔磨：訾字。〕	字書或爲訾字也。	無	無
5	詢	詢	道力反。小兒未能正語也、祝也。 〔詢：詢字。〕	説文或詢字也。	同上。	詢 或 从 包。
6	訇	訇	胡鑿反。音大。 〔訇：訇字。〕	説文籀文訇字也。	籀文。	籀 文 不 省。
7	讖	讖	胡濫反。誕也、話也、調也。〔讖：讖字。〕	説文俗讖字也。	同上。	俗 讖 从 忘。
8	誚	譙	似醮反。讓也、蹶也、訶也、媯也、煞也。 〔誚：譙字。〕	聲類亦譙字也。	無	古文譙从肖。周書曰亦未敢誚公。
9	讒	謬	居展反。難也、吃也。 〔讒：謬字。〕	聲類亦謬字也。	同上。	無
<b>第五帖</b>						
10	異	異	助纒反。撰字。 〔異：古文數。〕	説文古文異字也。	古文。	古文異。
11	𠄎	其	渠基反。辭也、豈也。 〔𠄎：古其。〕	亦古其。	古文。	無
12	𠄎	卜	補祿反。〔𠄎：古文。〕赴也。	説文古文卜字也。	古文。	古文卜。
13	較	較	古學反。見也、明也。 〔較：同上。〕	字書亦較字也。	古學切。兵車也。又古孝切。	無

14	輻	輻	力庭反。門橫木。〔輻：同上。〕	說文司馬相如說輻字如此。	同上。	輻或从雷、司馬相如說。
15	輻	輻	視專反。无輻曰輻。〔輻：同上。〕	聲類亦輻字也。	同上。	無
16	輻	輻	魚鷄反。輻端橫木。〔輻：同上。〕	說文亦輻字也。	同上。	輻或从宐。
17	輻	輻	他同反。盛兒。〔輻：同上。〕	字書亦輻字也。	同上。	無
18	輻	輻	仕潤反。載柩車。〔輻：同上。〕	聲類亦輻字也。	同上。	無
19	輻	輻	呼苟反。〔輻：同上。〕	字書亦輻字也。	同上。	無
20	般	般	菩安反。樂也、施也、大也。〔般：同上。〕	說文古文般字也。	無	古文般从支。
21	灑	灑	力蜀反。度也、水至心為灑。〔灑：同上。〕	說文亦灑字也。	同上。	灑 或 从厲。
22	澁	澁	直斬反。水不流、安也、沒也、露盛兒。〔澁：古文。〕	說文古文澁字也。	古文。	古文。
23	滾	滾	思微反。小雨。〔滾：同上。〕	淮南雨霓濃澁、則澁	先悲切。同上。	無
24	涵	涵	胡耽反。水澤多。〔亦涵。〕	胡耽反。說文水澤名也。毛詩僭始既涵。	同上。又下啗切。沒也。	無
25	洳	洳	如鹿反。漸濕也。〔洳：同上。〕	亦洳字也。	同上。	無
26	濕	溼	尸立反。水流就幽也、詩也、遲也、潤也、主也。〔濕：或。〕	字書亦溼字也。	同上。說文：他合切。	無
27	灑	灑	所留反。清汰也、小便也。〔灑：古文。〕	字書古文灑字也。	無	古文。
28	灑	灑	里激反。清酒也、沃。〔灑：今同上。〕	聲類今灑字也。	同上。	無
29	灑	灑	里屋反。竭也。〔灑：同上。〕	說文或灑字也。	說文與灑同。又音綠。水也。	灑或从录。
30	澂	澂	思閏反。須也、取也、深也。〔澂：同上。澂：古文。〕	說文古文澂字也。	同上。	古文。从水、从睿



坎 呼決切。深也、空也。亦作窩。(宋本玉篇 上 15 丁裏)

「坎」の項目について、万象名義では、掲出字が脱落し、反切上字「呼」が掲出字の位置にある。新撰字鏡と宋本玉篇では上記の記述を確認できた。新撰字鏡では「坎」の項目が玉篇引用部分であり、その音注・義注が万象名義と一致する。

(22) (里) 旅擬反。(第 1 帖 38 丁表)

万象名義では「里部」に「□→野→釐」(最初の掲出字が脱落)という掲出字順である。宋本玉篇では「里部」に属する掲出字は 3 字であり、「里→野→釐」の順番になっている。ゆえに、万象名義の「里部」の部首字である「里」が脱落したと考えられる。

#### 4.5 脱字 B

宮澤(1977)と池田(2014)を踏まえて、説文解字及び玉篇残巻・逸文、新撰字鏡の玉篇引用部分、宋本玉篇(増補部分を除く)に本文が存し、元来万象名義にもあったと考えられるものを整理すると、全部で 476 項目が該当する。帖ごとの内訳は、第 1 帖 34 項目、第 2 帖 92 項目、第 3 帖 110 項目、第 4 帖 132 項目、第 5 帖 35 項目、第 6 帖 73 項目である。脱字 B について、玉篇残巻と対応する箇所を確認すると、玉篇残巻で異体掲出字として掲載されたものの多数は、万象名義に見えない。原本玉篇の掲出字項目は主に一般掲出字項目と異体掲出字項目に分けられる。異体掲出字は、前述のようにある掲出字に続けて異体関係にある文字を掲出する様式である。一般掲出字項目は、典拠や用例によって意味を記述するに対して、異体掲出字項目は、異体関係を示すことに重点をおいている。

玉篇残巻の巻 9 を例にすると 693 掲出字項目がある。内訳は、一般掲出字項目が 637 項目、異体掲出字項目が 56 項目である。玉篇残巻の巻 9 の範囲で万象名義が玉篇残巻の異体掲出字と対応しないものは 47 項目ある(表 2)。これに対して宋本玉篇が原本玉篇残巻の異体掲出字と対応しないものは 5 項目しかない。脱字 B 全体の 476 項目のうち、295 項目の異体掲出字は万象名義では見えないことが確認できる<sup>9</sup>。

表 2 万象名義における原本玉篇の異体掲出字の採録状況(原本玉篇残巻・巻 9)

番号	異体掲出字	上字	原本玉篇の注文	万象名義	宋本玉篇
1	論	話	説文籀文、話字也。聲類或僮字也。僮合僮市也。音古會反。在人部。人部字書古文為𠄎字、在舌部也。	○	○
2	諺	諺	聲類亦諺字也。	○	○
3	釐	諄	説文福文諄字也。	○	○
4	變	緜	説文古文緜字也。	×	○
5	膺	訾	字書或爲訾字也。	○	×
6	詭	詢	説文或詢字也。	○	○

9 玉篇残巻と対応する部分は例示した巻 9 と同手順で確認し、玉篇残巻と対応しない部分は、原本玉篇の重文の代替として宋本玉篇の重文を用いて確認した。

7	旬	旬	說文籀文旬字也。	○	○
8	諗	讖	說文俗讖字也。	○	○
9	這	誕	說文籀文誕字。	×	○
10	讜	講	字書或講字也。	×	○
11	謔	謔	聲類亦嗟字也。	×	○
12	讐	讐	說文籀文龍字不省。	×	○
13	謔	誣	字書亦謔字也。	×	×
14	說 / 訥	詢	說文亦詢字也。 / 說文亦詢字也。	×	○
15	訟	訟	說文古文訟字也。	×	○
16	誚	譙	聲類亦譙字也	○	×
17	讓	謫	聲類亦謫字也	○	○
18	誦	訴	說文亦訴字也	×	○
19	誦	誦	說文亦誦字也。	×	○
20	調	調	說文亦調字也。	×	○
21	譎	譎	說文亦譎字也。	×	○
22	謨	謨	說文亦謨字也。	×	○
23	詢	詁	說文亦詁字也、聲類或為詁字、在口部。	×	○
24	誦	誘	說文亦誘字也。	×	○
25	諳	諳	字書亦諳字也。	×	○
26	諺	託	字書亦託宅也。	×	○
27	曹	曹	字書今為曹字也。	×	○
28	乃 / 孑	乃	說文古文乃字也。 / 說文籀文乃字也。	×	○
29	廬	廬	說文古文廬字也。	×	○
30	于	亏	字書今為亏字也。	×	○
31	毀	毀	說文籀文毀字也。	×	○
32	嚴	嚴	說文古文嚴字也。	×	○
33	齒 / 莧	次	聲類古文次字也。 / 字書亦古文次字也。	×	○
34	餼 / 餼	饋	說文或饋字也、餼、脩飯也。 / 說文亦饋字也。	×	○
35	糞	糞	說文籀文糞字也。	×	○
36	饌 / 餽	飴	說文亦飴字也。 / 字書亦飴字也。	×	○
37	饌	養	說文或養字也。	×	×
38	饌	簞	說文互簞簞字也。	×	○
39	履	饋	字書古文饋字也。	×	○

40	飭	餽	説文或飭字也。	×	○
41	滄	餐	説文今滄字也。	×	○
42	飮	餽	字書亦為餽字。	×	○
43	飮	飮	字書亦為飮字。	×	○
44	餽 / 饗	飽	説文古文飽字也。 / 説文亦古文飽字也。	×	○
45	饗	饗	説文籀文饗字也。	×	○
46	饗	飮	亦飮字也。	×	○
47	饗	饗	字書古文饗字也。	×	○
48	飮	飮	字書古文飮字也。	×	○
49	饗	饗	方言饗醜也、字書亦為饗字。	×	○
50	饗	饗	聲類亦饗字也。	×	○
51	飮	饗	穀梁傳、惟哭飮粥。廣雅飮、饗也。説文亦饗字也。	×	○
52	饗	飮	説文古文飮字也。	×	○
53	飮 / 𠂔甘瓦	飮	説文亦飮字也。 / 字書古文飮字也。	×	×
54	甚	甚	説文古文甚字也。	×	○
55	旨	旨	説文古文旨字也。	×	○
56	次	次	字書籀文次字也。	×	○

## 5 本稿における万象名義の掲出字数の集計<sup>10</sup>

本稿の結果を表3に示す。表3には、巻ごとに隷書掲出字、埋字A・B、脱字A・Bの字数と合計の結果を示す。比較対照として、柳・劉・李（2013）の結果も掲げる。

柳・劉・李（2013）の掲出字は、脱字Aに相当するものは含むが、注文中に繰り込まれた掲出字、つまり埋字Aを隷書掲出字と区別せずに集計する。重文は埋字Bに相当するものである。ただ、柳・劉・李（2013）では、重文の認定規準が明記されないため、詳細に比較することは難しい。柳・劉・李（2013）の認定した掲出字15,925字に相当する本稿の隷書掲出字・埋字A・脱字Aの字数の合計は15,962字である。埋字B（重文）を加えると、本稿の集計結果は16,523字となり、柳・劉・李（2013）のものは16,555字となる。さらに、脱字Bを加算すると、本稿における掲出字数の合計は16,999字になるが、誤写、重出の問題を整理すると、万象名義の掲出字数はこの結果よりいくぶん少なくなると推測される。

10 字数は、発表後に再度点検し、修正した字数である。

表3 万象名義の掲出字数表〔柳・劉・李（2013）と対照〕

本稿						柳・劉・李（2013）		
巻数	隷書掲出字数	埋字 A	脱字 A	埋字 B	脱字 B	巻数	字頭	重文
1	103	5	0	57	2	1	111	48
2	93	1	0	21	2	2	100	22
3	94	20	0	13	0	3	110	14
4	163	18	0	21	3	4	183	19
5	121	19	4	21	7	5	143	22
6	199	21	0	1	5	6	220	2
7	174	9	0	11	1	7	193	10
8	217	4	0	3	1	8	222	6
9	351	0	0	4	11	9	353	2
(10)	—	—	—	—	—	10	—	—
11	167	8	0	11	1	11	172	9
12	264	0	0	21	1	12	273	20
13	156	0	0	4	5	13	156	3
14	320	0	3	2	13	14	323	1
(15)	—	—	—	—	—	15	—	—
16	187	1	1	0	8	16	189	0
17	107	0	1	1	8	17	108	0
18	121	0	0	0	11	18	121	0
19	226	0	0	0	3	19	226	0
20	87	0	0	0	12	20	86	0
21	198	0	0	0	5	21	199	0
22	123	0	0	0	8	22	123	0
23	206	0	0	2	4	23	206	1
24	139	0	0	0	6	24	140	0
25	152	0	0	0	6	25	152	0
26	130	0	0	0	3	26	130	0
27	158	0	0	1	1	27	158	1
28	206	0	1	10	8	28	206	6
29	186	0	0	3	26	29	187	1
30	165	1	0	0	17	30	166	0

31	155	0	0	0	29	31	155	2
32	213	0	0	0	4	32	213	0
33	189	0	1	4	1	33	187	5
34	88	0	0	1	1	34	89	0
35	96	0	0	1	11	35	96	1
36	161	0	0	1	4	36	161	1
37	194	0	0	4	2	37	195	2
38	173	0	0	3	8	38	173	4
39	179	1	0	14	3	39	176	12
40	117	0	0	3	7	40	113	3
41	119	0	2	4	67	41	118	5
42	192	0	0	0	2	42	192	8
43	176	0	0	6	15	43	167	6
44	157	0	0	10	5	44	154	10
45	181	1	0	5	2	45	178	5
46	226	0	0	5	3	46	223	3
47	133	0	1	6	7	47	132	7
48	153	0	0	1	8	48	152	3
49	132	0	0	3	8	49	129	4
50	205	0	0	3	0	50	205	12
15	313	2	0	17	8	15 之下	319	21
16	345	11	0	32	3	16	385	37
17	347	9	1	52	9	17	327	53
18	733	5	0	57	5	18	737	60
19	633	4	0	44	3	19	636	46
20	512	9	0	26	5	20	516	42
21	465	0	0	41	5	21	464	52
22	616	0	0	7	7	22	609	14
23	712	0	0	0	5	23	708	10
24	625	0	0	1	6	24	626	2
25	598	0	0	1	13	25	594	3
26	427	0	0	0	7	26	429	0
27	413	0	0	0	10	27	411	2

28	431	0	0	1	11	28	427	2
29	275	0	0	0	8	29	573	6
30	300	1	0	1	8	(30)		
合計	15,797	150	15	561	476	合計	15,925	630
	15,947		15	561	476			
	15,962			561	476			
	16,523				476			
	16,999						16,555	

\*巻数 (10)・(15) は万象名義の原文に記載なし、巻 (30) は柳・劉・李 (2013) に脱けている。

## 6 おわりに

成立当初の万象名義、もしくは原本玉篇に存在した可能性のある掲出字の全体像を描くために、本稿では記述構造の観点から高山寺本を整理し、説文解字、宋本玉篇、原本玉篇残巻、新撰字鏡などを総合することによって、考察対象の広義掲出字を三つのカテゴリーに区分したうえで、その範囲を限定したい。

次の図で示しているように、隸書掲出字は 15,797 字あり、脱字 A は 15 字あり、埋字 A は 150 字あり、埋字 B は 561 字あり、脱字 B は 476 字ある。これらは a・b・c のカテゴリー別に分けられ、万象名義、もしくは原本玉篇に掲出字として収録された可能性の順序は次の通りである。

a > b > c

<b>a</b>				
<b>隸書掲出字</b> 15,797				
<b>脱字 A</b> 15		<b>b</b>		
		<b>埋字 A</b> 150		<b>c</b>
		<b>埋字 B</b> 561		<b>脱字 B</b> 476
15,812		711		476
16,523				476
16,999				

図 万象名義における掲出字の階層について

a : 隸書掲出字と脱字 A は万象名義では独立した項目である。体裁上、万象名義の掲出字として収録されていることを確認できた。

- b : 埋字 A と埋字 B とはほかの項目の注文中に繰り込まれる項目である。埋字 A について、宮澤（1977）と呂（2007）では主字と別に立項した。埋字 B について、宮澤（1977）は主字の以外に立項したが、呂（2007）はほとんど注文中内字として処理し、新たに立項しない。
- c : 説文解字及び原本玉篇残巻・逸文、新撰字鏡の玉篇引用部分、宋本玉篇（増補部分を除く）に本文が存するため、万象名義にも存在した可能性が高い項目である。宮澤（1977）は脱字 B について、万象名義や原本玉篇に本来存した可能性が高い字として認定し、「掲出字」一覧表に反映させている。

以上、主に万象名義の項目の記述構造に着目し、埋字と脱字を整理することによって、隸書掲出字以外に、万象名義の注文レベルに存した可能性のある掲出字と脱落したと考えられる掲出字を考察した。本稿では、a・b を合わせ、つまり高山寺本万象名義にその存在を確認できる掲出字として、隸書掲出字・埋字 A・埋字 B・脱字 A を認定し、16,523 字とした。そして、c の脱字 B を加えると、16,999 字になる。現在、誤写、重出の問題を整理するまえの段階であり、脱字 B すべてが万象名義にあったかどうかは確言できない。現段階では、本来万象名義の掲出字数を想定できる範囲は 16,523 字から 16,999 字である。

本稿はまず準備段階として、万象名義の隸書掲出字、埋字、脱字を整理した。次に、掲出字中の誤字・重複字を確実に指摘整理した。この二つの分析によって、万象名義の掲出字を明らかにするとともに、本文の増訂と脱落を検討する基礎とする。さらに、説文解字から原本玉篇、原本玉篇から宋本玉篇への増字の状況の把握をも目的としている。これらの問題の解明は今後の課題にしたい。

## 参考文献

- 池田証壽（2014）「平安時代漢字字書総合データベースの構築」、『北海道大学文学研究科紀要』142
- 上田正（1970）「玉篇残巻論考」、『神戸女学院大学論集』17-1
- 大柴清圓（2009）『『篆隸万象名義』の部首一覧並びに部首索引表』、『高野山大学大学院紀要』11号
- 岡井慎吾（1933）『玉篇の研究』、東洋文庫論叢第19、東洋文庫
- 川瀬一馬（1955）『古辞書の研究』、大日本雄辨會講談社
- 貞刈伊徳（1958）「玉篇と篆隸万象名義について」、『国語学』131集
- 貞刈伊徳（1989）「日本の字典—『篆隸万象名義』『新撰字鏡』『類聚名義抄』—」、漢字講座2『漢字研究の歩み』、明治書院
- 工藤祐嗣（2002）「原本系『玉篇』字体注記の『篆隸万象名義』・『大広益会玉篇』への受容の状況について—「重文」を中心とした考察」、『訓点語と訓点資料』第108輯、訓点語学会
- 馬淵和夫（1978）「紹介 高山寺古辞書資料第一」、『国語と国文学』55-2、東京大学国語国文学会
- 宮澤俊雅（1977）「掲出字一覧表」、『高山寺古辞書資料第一』、東京大学出版会
- 宮澤俊雅（1998）「崇文書版篆隸萬象名義について」、『平成九年度高山寺本典籍文書総合調査

- 団研究報告論集』、高山寺典籍文書綜合調査団（代表者：築島裕）
- 山田孝雄（1928）「解題」『篆隸萬象名義 空海撰』、崇文叢書 第1輯之27-43、崇文院
- 吉田金彦（1954）「圖書寮本類聚名義抄出典攷（中）」、『訓点語と訓点資料』、第3輯、訓点語学会（『古辞書と国語』、2013、臨川書店に再録）柳建鈺・劉芹芹・李慧楠（2013）「《篆隸萬象名義》收字积层狀況研究」、『三峡大学学报（人文社会科学版）』35卷2期、三峡大学
- 呂浩（2006）『《篆隸萬象名義》研究』、上海古籍出版社
- 呂浩（2007）『篆隸萬象名義校釋』、学林出版社
- 楊守敬（1901）『日本訪書記』、『楊守敬集』第8冊、1988、湖北人民出版社に再録）
- 臧克和（2004）「《玉篇》の层次——基于“《说文》《玉篇》《万象名義》联合检索系統”调查比較之一」『中国文字研究』第五輯华东师范大学中国文字研究与应用中心
- 張煦（1934）「玉篇原帙卷數部第敘說」、『國立山東大學文史叢刊』1期、國立山東大學出版課
- 周祖謨（1935）「論篆隸萬象名義」、『國學季刊』第5卷第4号、國立北京大學

## 使用テキスト

- 『高山寺古辞書資料第一』東京大学出版会 1977
- 『古逸叢書』遵義黎氏 1884
- 『東方文化叢書第六』東方文化学院 1932-35
- 『大広益会玉篇』中華書局 1987（澤存堂本）
- 『説文解字』中華書局 2013（澤存堂本）

## 付記

本稿は平成26年11月2日の第111回訓点語学会研究発表会（於東京大学山上会館）においての発表原稿を基に、その後の調査・考察を加えて成稿したものである。席上及び閉会後に御教示下さった先生方に深く感謝申し上げる。